

# 槐

かい

岡井省二創刊

令和4年2月号

令和四年二月一日発行 第三十二巻第二号  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第三六八号（毎月一回一日発行）



# マリンスノー

高橋将夫

冬耕は夢を耕すことであり  
日の当たる時は短かし紅葉谷  
三寒に笑ひ四温に涙あり  
三寒を忘れてあたる四温かな

セーターをほどこきセーター編みにけり  
抱き合つて寒さをしのぐ道祖神  
木の实降る機銃掃射のごとく降る  
愛情も炭火も炎秘めてをる  
ももんがが深紅の闇を抱へ飛ぶ  
我と炭いづれは灰となる身かな  
冬の海いのちのはてのマリンスノー

# 日月抄

高橋将夫 推薦

遠 き 日 の 家 路 を 思 ふ 冬 至 か な	冬 な か ば 笑 顔 の 意 味 を 考 へ る	紅 葉 づ り て 奈 良 の 石 仏 深 呼 吸	芋 頭 誰 か 寄 り 添 ふ わ が 人 生	柚 子 風 呂 や 未 練 も 欲 も な か り け る	永 観 堂 消 火 器 足 り ぬ 紅 葉 か な	空 つ ぽ と 言 ふ 充 足 や 日 向 ぼ こ	幸 せ は 心 の 奥 へ 青 木 の 実	紅 葉 散 る 流 派 に 裏 と 表 あ り
柴 田 靖 子	中 西 厚 子	高 野 昌 代	井 上 静 子	中 貞 子	出 利 葉 孝	久 保 夢 女	阪 倉 孝 子	三 木 亨

幾年や補綴外るる秋の暮

阿部さちよ

一分の遅れ詫びをり秋車内

竹村 淳

捨案山子を勞うてをる日差しかな

中島 昌子

祝事の帰り狐火ついてくる

橋本 順子

冬の日を腰のあたりに筆の寺

柳 橋 繁子

雪吊りや軸足ぶれぬ男振り

時 澤 藍

海底の石浮いて来し神無月

植 木 戴子

秋星を夢に持て行き寝落ちたり

星 野 昭子

# 槐集

高橋将夫選

紅葉散る流派に裏と表あり

守口 三木 亨

帳尻はいつか合ふはず片時雨  
落葉にも一葉一葉の枯れぐあひ  
ダンディーで終始笑顔の青写真  
インスタにその都度あがる神の旅  
冬銀河土鈴鳴らして始発駅  
木瓜は実には吾弁天になりたしよ  
幸せは心の奥へ青木の实  
このままの今を生くるや寒椿  
ドアノブの発電するや虎落笛  
神降臨大げさだよと金木犀  
善と悪せめぎ降り積む落葉かな  
初時雨猫にんまりと傍らに  
帳尻は合つてゐるよと冬木かな  
空つぽと言ふ充足や日向ぼこ

枚方 阪倉 孝子

竹原 久保 夢女

枯芒やうやうにして好好爺

大阪 出利葉 孝

残菊や束ねられしも色香あり

軒下は懸大根の美脚かな

永観堂消火器足りぬ紅葉かな

残菊は千秋楽の新派かな

雪吊や縄にゆるみのなかりける

葉蘭叢に安堵のやうす冬の蝶

照紅葉白寿の遺影となりにけり

炭斗や不用の遺品輝ける

柚子風呂や未練も欲もなかりける

朝まだき立冬の気を深く吸ふ

雲ひとつ無き早朝の神渡し

牛蒡引くふるさとの風香りける

芋頭誰か寄り添ふわが人生

取り消しの出来ぬ言の葉冬三日月

枚方 中 貞子

井上 静子